

京都文化カプロジェクト実行委員会理事会（第3回）

主な御意見

- 京都の強みは 1300 年の歴史であり、歴史のなかで積み重ねられてきた様々な建物、あるいは文化的・芸術的な品々は、過去からのメッセージだと思っている。
そのメッセージは、要約すると、日本人の情緒や心である。京都という場所は山に囲まれ、自然を大切にしながら、その様々な情景を詠んだり、物にしたり、拝んだりという文化のなかで、日本人の心が醸成されてきたと思う。
その和の情緒を、根本に据えながら、新しいものをどんどん取り込んでいかなければならない。つまり、世界の様々な民族、様々な国、様々な文化との連携を図りながら、人間の情緒というものを、ここでの対話を通じて発信していかなくてはならない。
言うなれば、過去からのメッセージを吸収しながら、横の広がり、現在の地球のメッセージを聞き、そしてさらには AI など様々な ICT を使って、未来からのメッセージを聞けば「創造する文化」という言葉が生きていくのではないかと思っている。
また、1300 年の歴史をつなぐのは、やはりアカデミズムだろう。東京、関東の芸術家、文化の専門家たちとつないでいく。さらには京都の様々な文化を、京都にある芸術系大学と協力して作る京都アカデミックフォーラムを窓口にして、アカデミズムの力を持って発信していく場にできればと思っている。
- この京都文化カプロジェクトは、新たな地域文化創生本部と、車の両輪として動いていく。東京とは、ひと味もふた味も違う事業の展開が必要であり、京都が持っている歴史的な情報を現代にふさわしく再編集し、それをさらにパワーアップしていくということになる。AI などと伝統的な職人技、工芸的なモノづくり、このようなものを融合していくなかに、新しい産業、あるいは京都市的なモノづくりが見えてくる。
これは一見すると、大量生産と対局的、職人的工業的な 1 点ものの生産に戻るようなところがあるが、歴史がより高い次元で、スパイラルに発展する姿を京都が体現していくことで、東京と違う Arts & Culture を発信できると思う。
- 京都文化カプロジェクトの最終の見せるべき姿とは、世界が文化都市というものを考える時に、京都がモデルケースになる姿を作るべきだと思う。
そのなかで、文化都市の問題は、極めて単純明快である。
例えば、安心・安全のシステムが都市として機能するよう整備ができていて、海外からやって来た人たちに不安を抱かせないこと。
次に、交通の便が良いことや、SNS での情報発信等が簡単にできるよう整備され、便

利ということ。

また、楽しいとか美味しいということも必須条件であるだろう。

そして、「環境にしろ、人にしろ、京都には、美しさが根付き、至るところでそれが感じられる」というような都市であれば、喜んでもらえるだろうと思う。

単純なことなのだが、実は非常に難しいことでもあり、それが、網の目のように、連携して都市ができると、理想的な文化都市だと思う。2020 年に向かって文化都市を形成し、それをその後、レガシーとして残していく。理想論かもしれないが、できないことはないと思っている。

- 文化というものは、一時的・激情的なものではなく、長年の日々の国民・庶民の生活の積み上げ、あるいはそういうものの時間の尊さというほかに、基本的な時間の積み重ねが大きな価値であり、その点、京都は非常に大きな価値を持っている。
アカデミックな、文化の素養を大切にしながら、一つ一つ積み上げていくのが一番だと思った。
- 我々神社界、境内で何かできることがあるのかな、ということと思う。
神社の境内の中で、文化的な行事をしているところがたくさん増えている。神職側もそのような理解をして、場所を提供している。
今回の事業についても、神社の境内を使っていたら、何かひとつの企画になるのではと思う。
- 今年は、「古典の日が法制化されて5周年」ということで、11月を中心に「古典の日月間」と位置づけ、精力的に取り組みたいと考えている。2020年に向けて、平安文化力を中心テーマのひとつとして、古典の日推進事業に取り組んでいきたいと思っている。
- 世界に発信すべく何ができるか。
振り返れば、神道と仏教は、廃仏毀釈以前の1000年間は大変仲良くやってきた。明治以来、途絶えてしまった様々な神仏の交流の行事があるはずであり、それを復活したいと思う。伏見稲荷と東寺、比叡山と八坂神社、金閣寺と北野天満宮などのように、日本独特に1000年育んだ神仏の部分、そして京都からそれらを発信していくということの大切さを、考えるきっかけを作りたい。
- 一つ目としては、2020年まで、あるいはそれを超えても、京都活性化として、いろいろな面で盛り上げていくために、民間の方々が、自発的にいろいろな活動ができるように、うまく仕向けていく工夫が必要である。特に、京都は大学が多く、若い人た

ちの独特の発想でもって、盛り上げていく。民間の方々の活力をそういうところから引き出すということを考えると、もっとこの地に着いた京都全体としての華々しさというのが出てくるのではないかと思う。

二つ目は、イベント等いろいろなことをやるなかで、新しい文化を創造していくということが必要であり、世界のいろいろな専門家、ベテランを招いて、会議や会合を開催する。例えば、世界にはあらゆる種類のお酒があり、それらを一堂に集めて比較をしたり、各地の文化がお酒によりどうなっているのかというようなことを、シンポジウム形式でやったり、ビエンナーレ形式でやっていく。お酒だけではなく、世界中にいろいろなお茶があり、お花も、世界中でお花を楽しむ人たちがいる。そういう人たちを集めて、いろいろ議論することにより、新しいコンセプトが出てくるのではないかと思う。

そのなかで、宗教や哲学、あるいは世界平和のために何を考えたらいいかというような学問的な議論の場も作っていくと、より一層よいのではないかと思う。

三つ目は、京都には博物館や美術館などが多くあるが、その展示方法である。美術工芸だけではなく、京都でなければできないような独特の産業技術というのがある。そういうものも見せるというような形で、無形文化財的などところにも積極的に出て行って、体験学習をしてもらおう。府や市が直接はできないところを、民間の方々の活力を引き出すという形で、実現していくのがよいのではないか。

四つ目は、いろいろな多くの内容を、世界にどのようにPRしていくか。これは、言葉の問題があるから、自動翻訳などを使って発信していくということが必要である。日英中韓だけではなく、例えばインドネシア語、タイ語、ベトナム語、アラビア語なども自動翻訳でき、コストは余りかからないような時代になってきている。また、京都市内のいろいろなところにある案内掲示板や観光案内の掲示板を電子掲示板にして、言語を中国語や韓国語、英語のほかベトナム語で読めるとか、そのような工夫もあればいいと思う。

もうひとつ大事なことは、コンテンツ、情報である。例えば、観光案内や和食に関する情報があちこちにいろいろな内容のものがあるが、それを府や市で統合化して、そこにアクセスすれば自分の欲しい情報が全部取れるというような、統合的な京都に関するデータベースづくりを、是非していただきたい。そうすると、京都、あるいは日本の文化、あるいは産業、といったことについて外国人が理解できるし、もちろん、日本人たちも理解できる。